

ケータイ・スマホに関するライフスタイル研究 (2)

— スマホ利用によるシニアの生活変化 —

飽戸 弘¹ 吉良 文夫² ○水野 一成²

¹ 東京大学名誉教授 ² NTTドコモ モバイル社会研究所

1. 研究背景及び分析の目的

2019 年 1 月時点で、60 代のスマートフォン所有率は 7 割を超えた。また 70 代においても、4 割を超える人が所有しており、シニア世代においても、スマートフォンの普及が進んでいる[1]。スマートフォンの普及は、私たちの生活に大きな生活の変化をもたらしてきた。何時でも情報を調べられることにより、例えば電車の乗り換えなどは随分と楽になった。

一方、普及が進むにことに対し、気になる調査結果も得ている。スマートフォンを所有していながら、従来型のケータイのように「電話やメールで十分」と考えるシニアや、2017 年に本学会で報告した通り、スマートフォンの関与を分析したところ、「不満派」や「消極派」が 45%存在した[2]。

本稿では、スマートフォンを所有しているシニアにおいて、どれほどのシニアが生活に変化を感じているのかを調査し、生活の変化を感じている人、感じていない人の特性は何かを明らかにすることにした。

2. 調査概要

調査時期：2019 年 1 月 調査対象：全国、15～79 歳男女 調査方法：web 調査

標本抽出法：QUOTA SAMPLING 性別(5 歳刻み)・年齢・都道府県で割付 6,000 サンプル回収

3. 調査分析手法

NTT ドコモ モバイル社会研究所が 2019 年 1 月に実施した調査をもとに、60・70 代の中で、スマートフォンを所有している人 (n=1,169)を今回の分析対象とした。

分析の工程としては、①「スマートフォンによる生活の変化」に関わる 11 項目の回答を元に、因子分析を経て、クラスタ分析を行う②各クラスタの特性を明らかにするため、数量化理論第Ⅱ類を用い分析を行う。

4. 調査結果

「スマートフォンによる生活の変化」に関する 11 問の結果は表 1 の通りである。

表 1：スマートフォンによる生活の変化

すぐ調べる：76.0%	電車・車の渋滞情報等でのストレス減：57.1%
カメラ機能活用でメモ減：57.1%	道に迷わない：56.0%
簡単に商品を見つけてネットで購入：51.0%	カメラ・音楽プレーヤー等の専門機器の減：44.9%
簡単に商品を見つけ店舗で購入：43.5%	金融機関等の店に行く時間減：37.0%
チケットやクーポンの印刷減：35.8%	本・雑誌・新聞の持ち運び減：21.0%
財布やカード入れがすっきり：15.7%	

この回答を元に因子分析を実施した。その結果、3つの因子「情報」「購買」「紙類」が抽出された。この3因子を元に、クラスタ分析を実施した結果、表2のとおり、4つのクラスタに分けることができた。全因子が負であるS1は、スマートフォンによる生活の変化をあまり実感していない。その反対で、全因子が正であるS4は多方面において生活の変化の実感があるようだ。S2は「情報」のみ正であり、S3は「購買」が大きく正であった。

表2：スマートフォンによる生活の変化の回答結果を元にしたクラスタ

クラスタ		S1	S2	S3	S4
		小変化	情報活用	購買	多方面
因子	情報	-0.9	0.7	0.2	0.4
	購買	-0.7	-0.9	0.9	0.5
	紙類	-0.3	-0.3	-0.4	1.4
サンプル数		330	241	377	221
構成比		28%	21%	32%	19%

クラスタ分析で得た4つのグループの特性をみるため、数量化理論第Ⅱ類を用いて分析をおこなう。目的変数は表2の4クラスタ、説明変数は表3で示した13とした。

表3：説明変数の概要

大別	スケール	概要
ライフスタイル	家族との交流	4段階の尺度
	仲間との交流	4段階の尺度
	イノベータ得点[3]	イノベータスケールに関する4項目の回答結果を得点化
	個性派同調[3]	個性一同調志向に関する2項目の回答結果を得点化
	時間的ゆとり	4段階の尺度
	経済的ゆとり	4段階の尺度
ICT	パソコン所有	所有の有無
	スマホを持った時期	4段階の尺度
	スマホを持ったきっかけ	他の調査を元にオリジナル尺度を作成
属性	性	—
	年代	10歳刻み、2段階の尺度
	有職無職	—
	都市区分	4段階の尺度

1軸モデルの式の寄与率が63.2%と高いため、本稿での説明はこの1軸を用いて行う。1軸は判別グラフ図2のとおり、1群「小変化」（負の軸）と4群「多方面」（正の軸）が分かれる結果であるため、シニアがスマートフォンによって生活に影響が多い、少ない両群の説明と言えよう。なお、判別の中率は60.6%、相関比は $\mu=0.38$ と高くない値ではあるが、偏相関係数を中心に結果を考察していく。

1軸の偏相関係数をみると、最も大きいのは「スマートフォンの所有期間」であり、より長く所有している人ほど、多くの生活への変化を実感している。次に高いのは「スマートフォンの所有きっかけ」であり、「使いたい機能がある・周囲がスマートフォンを持っている・料金が安い」など能動的な理由であると、変化を実感している。それ以降は、ライフスタイルに関わる変数が上位となっている。

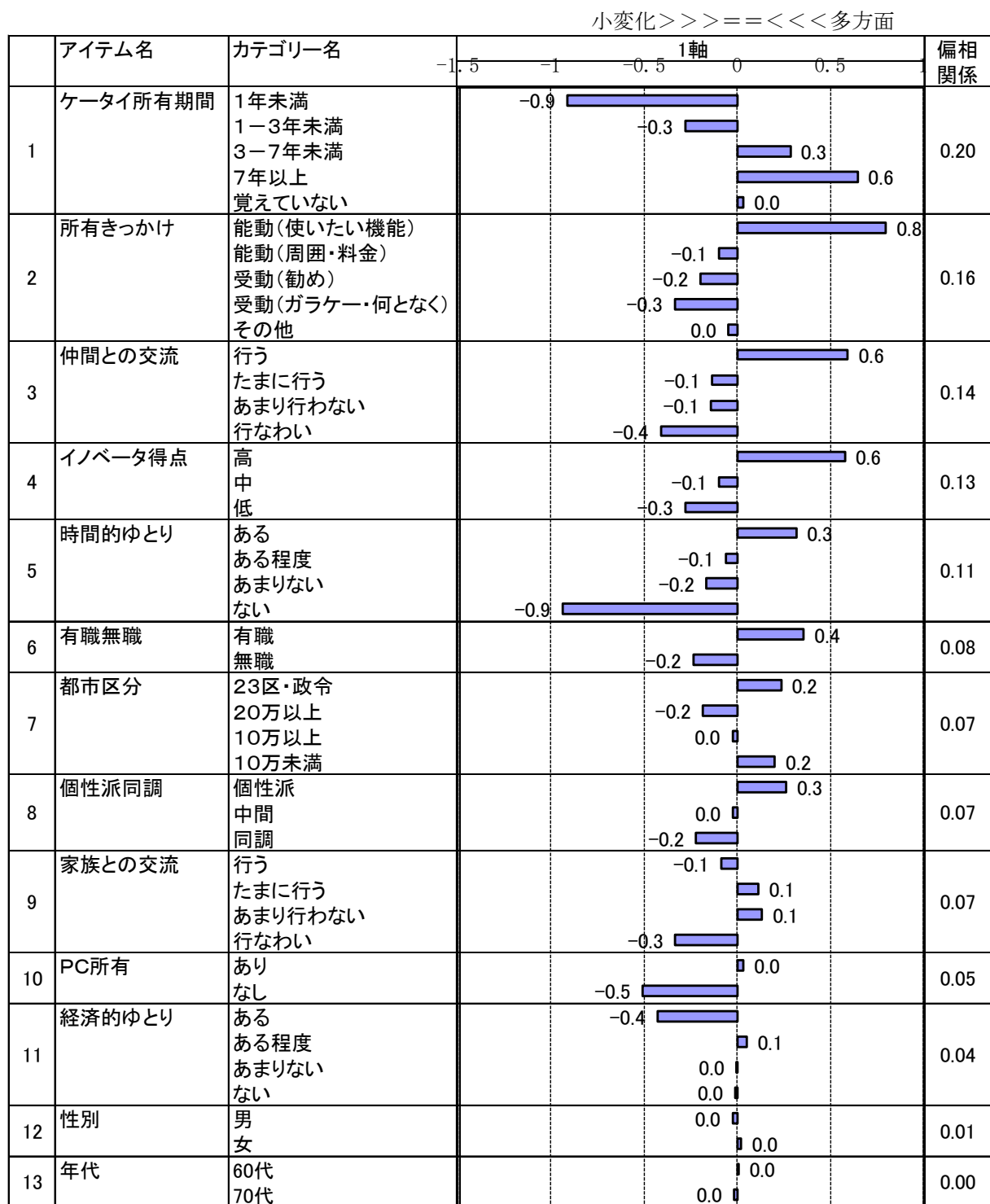


図1：数量化理論第Ⅱ類を用いたシニアのスマートフォンによる生活の変化の判別結果

3番目に高い変数は「仲間との交流」が行う人ほど、「多方面」に振れている。これらの変数とは反対に偏相関係数が低いものには「性別」や「年代」となった。

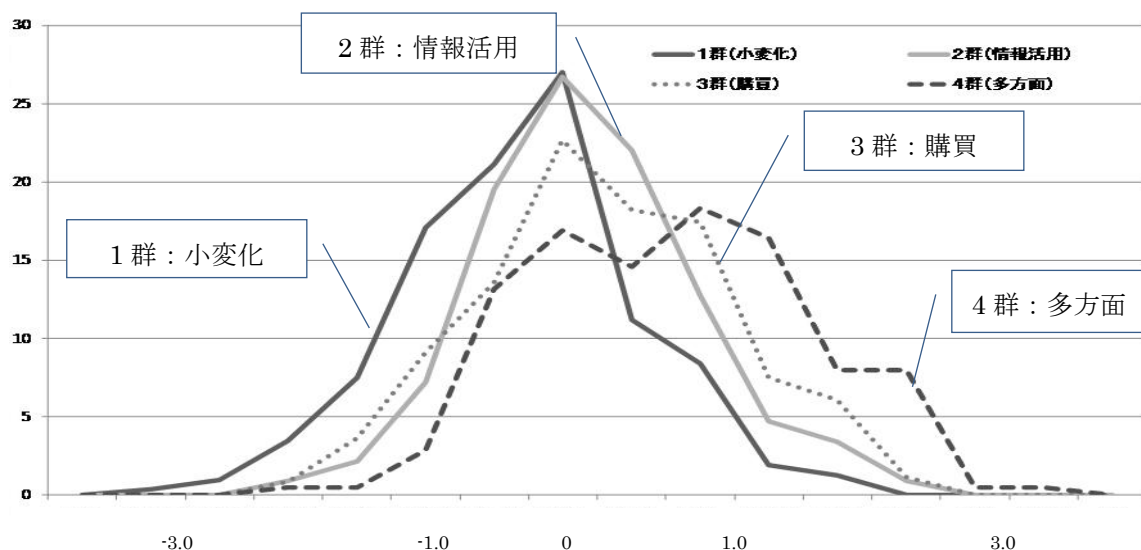


図 2：数量化理論第Ⅱ類を用いたシニアのスマートフォンによる生活の変化の判別グラフ 1 軸

5. 考察

今回の分析結果より、シニアとスマートフォンの関わりについて、3点言及したい。1点目は、偏相関係数が2番目に高かった「スマートフォン」所有理由である。私たちが毎年調査している結果をみても、徐々に能動的（使いたい機能があった）理由が減り、受動的（周りがスマートフォンを持っている等）理由が増えてきた。つまり、今後さらにスマートフォンの普及がこの世代に進むと、「小変化」の割合が増える可能性がある。

2点目は、同じ人との交流に関する説明変数では「仲間」との交流が「家族」との交流より、影響が大きい点である。推測の域ではあるが、スマートフォンが急速に普及するにつれて、シニア同士で伝え合う、教えあう状況が生まれているのではないだろうか。

3点目は、デモグラフィック要因（性別・年齢）の影響は低い点である。60代が先行して、普及をしているが、生活の変化に関しては、大きな差異は確認できなかった。

スマートフォンは所有することが目的ではなく、生活が豊かになることを実感することが、真に求められることではないだろうか。その基礎分析として、本稿は「スマートフォンによる生活の変化」に焦点をあてた。今後も、どのように変化していくか、注視していきたい。

6. 参考文献

- [1]<http://www.moba-ken.jp/project/seniors/ict21.html> (2019. 6. 9)
- [2] 飽戸弘・栗原一浩・水野一成(2017) ケータイ・ライフスタイル研究 (4) —スマホを所有するシニアのスマホへの「関与」に影響する要因— 『日本行動計量学会 第45回大会抄録集』, 60-63
- [3] 飽戸弘(1987) 『社会調査ハンドブック』 日本経済新聞社, 300-301